



# 町民文芸

## 只見短歌会 二月詠草

大塚栄一 指導

古川 英子

夫看取り起きる友か部屋の灯に雪積む夜半の障子明るし

齊藤ちひろ

無差別に物捨てれば勿体なし戦前戦後を生き来し我は

吉津 政枝

年々に夫子の年忌の供養なし来し方惚びわれも老いゆく

渡部ゆき子

民謡の東北大会出場とふ孫の電話に耳を疑ふ

皆川 恒子

雪まつりの雪像作る生徒らに年ごと多くのカレーライス作る

五十嵐英子

老いし身を労りくるる介護士らに頼りて早も三か月過ぐ

目黒 富子

積木手に眠りてゐるを炬燵辺に引き寄せてゆく孫軟らかし

馬場 八智

在りし日に姑がつきて来し杖を雪道歩むわが頼りとす

五十嵐夏美

凍てしるき朝降る雨に濡れてゆく路上滑りて小股に歩む

渡部ヨリ子

正月に帰省して来し子ら送り多き食器を一人片付く

新国 洋子

入所せし姉の空家の冷蔵庫ひと日かかりて姪と整理す

(出詠順)

## 只見俳句会 三月例会

目黒十一 指導

邦 夫

堅雪や無人駅まで曲りなく

冴え返る又冴え返るダムの村

康 女

永らいて傘寿の春を迎えけり

試着して買わずに帰る春の服

リウコ

裁ち方もおぼろと成りし細もんべ

吹雪の日毛糸を編めば気の和み

都

墨液の走る一の字春を待つ

一 穂

薪くべて今日の一日始まりぬ

爺様にもバレンタインの贈り物

洋 子

福寿草開かんとしてシャッター音

雪崩音言うべき事も言えぬまま

敦 子

雪野原一直線にけもの跡

掘割の水音高し春の午後

郁 子

年重ね話果てなき冬の宿

金星と三日月ペアに二月尽

礼

暖かしぶらりと出向く古書の街

流木のほむらやさしき暖炉かな

一 灯

鉄塔の山ゆさぶりにて春のへり

春雨や横に滴る板廂

又壺歩

胼割れの手に沁む朝の手水かな

足を病み春の日遅々と治り遅々

邦 男

雪国に雪積もらねば笑われず

如月や円柱囲む談話室

吉 児

門毎に国旗耀う大旦

旭日に向かいて喉の寒稽古

隆 堂

川岸の水に踊りて猫柳

南部鉄瓶湯気たてている雨水かな

恒 夫

春疾風閉校の窓吹き鳴らし

初ものの露味嗜食うて笑いけり

としよりは涙脆きよ兎汁

瀬戸内の海の真風ぎや初日の出

笑羊